

音楽科

鑑賞等における学びを活かした創作的表現活動の研究 ～リコーダー独奏によるアレンジ活動～

提案者 田川 ^{まさし} 聖旨

キーワード 創作 アレンジ 個性（オリジナリティ） 比較鑑賞 独創性 他者理解
音楽の諸要素 学び合い 話し合い活動

1. 音楽科における深い学び

1. 1. 中学校における音楽教育の意義

義務教育期である小中学校において、音楽科教育のなすべき役割については、教員一人ひとりによって大いに主張の違うところであろう。昨今の中教審において、中学における芸術教育を選択制にしてはという意見も出されたように聴く。そんな中、我々中学校の音楽科教員は、その主張や実践を通して、今こそ指導要領等で述べられている教科目標とは別に、中学校音楽教育の意義を更に強く世の中にアピールしていく必要があると感じている。そのためには、小学校音楽と中学校音楽の間で、更なる明確なねらいの違いを見出していくべきであろう。

特に中学校においては、楽譜に記されていることを「模倣的に」「感覚的に」再現することだけで満足する表現活動に終始してはならないのではないだろうか。楽曲分析（アナリーゼ）によって作曲者の意図を感じ取り「意図をもって」再現したり、自分（達）なりの解釈に基づいたアレンジ表現に取り入れたり、また、何らかの意図を持った創作活動を行うことによって、「個性（オリジナリティ）あふれる表現」「独創的な表現」を、小学校以上に数多く行っていくことこそが、中学校の音楽教育に課せられた使命ではないだろうか。

本校では、あらゆる鑑賞活動を通して、上記表現活動の基盤となる学びをさせていくための研究を近年行っている。たとえ同一作品（楽曲）であっても、「あらゆる表現の違い」＝「個性（オリジナリティ）」や「独創性」の違いが存在するということや、それらの素晴らしさに気付かせることを通して、その後の表現活動で「個性」「独創性」豊かな音楽表現を目指してもらいたいと考えている。

1. 2. 今年度の「学芸大 - OECDプロジェクト研究授業」の位置づけ

本年度、音楽科では大学との共同研究で、7月にOECDプロジェクト研究授業を行った。単旋律とコードネームのみが記載された楽譜を使っての「リコーダー独奏によるアレンジ活動」。今回は、従来から2年生で取り組んでいた題材に、「主体的・対話的な深い学び」のための活動として「話し合い活動」を今まで以上に取り入れた形で立案・計画した。音楽の諸要素(アレンジのヒント)について、参考楽曲の鑑賞活動で体得したことを活かしつつ、さらに仲間との授業内での数々の「学びあい」場面を通して、互いに学びを深め、アレンジ演奏に活かすことを目指した。

今年度は、「個人での表現（器楽）活動」を「集団での対話を通してより高めていく」ための授業研究であったが、来年度以降は「集団」や「歌唱」といった違う形での表現活動における研究も行った上で、深い学びについて継続的に考えていき、成果の発表をまとめていくこととしたい。

2. 研究主題設定の理由

2. 1. 本校音楽科の授業において「育てたい力」

本校音楽科では、以下の4点を育てたい力として掲げ、授業実践を行っている。

① 思い（感情・喜怒哀楽等）を表現する力・発想力（個性）・創造力

（上記で述べたこと以外に、）思春期は「（特に人前で）自らを表現することをためらいがちな時期」ではあるが、表現欲求が減るのではなく、むしろ「表現したいのに鬱積している時期」と言えるとも思う。本校音楽科の授業では、集団での表現活動においても、そういった個々の秘めたる個性を、集団に埋没させることなく表出させることを目指したいと考えている。

② 他者を理解し、受容する力

思春期特有の「（特に人前で）自らを表現することをためらいがちな時期」には、クラス・集団の雰囲気により、自分の意見・個性を「表現したい」という思いをその場で発揮しやすいかどうかによって授業で得られる達成感も大きく変わってくることとなる。各々の自我確立期における自己肯定感を少しでも高め、それによって、お互いが違う意見も大いに認め合い、個性を発揮しあえる学習環境をつくることに重きをおきたいと考えている。

③ 自主性・コミュニケーション能力

本校におけるとりわけ、「集団内における自主性」「仲間とのコミュニケーション能力」を、主に合唱等の演奏活動を通して育てていきたいと考えている。

④ 自国文化への理解と誇り

日本人はとかく外国人に比べ、自国文化への理解と誇りを持っていないといわれる。日本人がこれまで以上に国際社会で活躍していくには、自国の文化に誇りを持てる教育を芸術教育において行っていくことも必要と考えている。

※ 一人ひとりがこれからの時代に社会で求められる「表現力」「個性（創造性）」「協調性」「コミュニケーション能力」「他者を理解する力」などは、特に音楽教育においてこそ高めていける人間力と考え、指導を行っている。

今回の題材研究においては、上記のうち特に①②③を重視しつつ、さらに前項3. で述べた今日的実体解決のための実践として授業考案を行った。

2. 2. 本校音楽科独自の研究テーマ

本校音楽科では、私が着任した平成23年度より本校音楽科の掲げる独自の研究テーマとして、以下のことを掲げている。

〈表現・鑑賞活動において〉

楽譜など、既定のものに必要以上にとらわれ過ぎることなく、個々が各々のオリジナリティを認め合いつつ、オリジナリティあふれる表現活動とそのような表現を感じ取れる鑑賞活動を目指す。

2. 3. 本校におけるこれまでの研究の流れ

2. 3. 1. これまでの1年生における器楽授業実践事例（概略）

例えば、1年生の指導においては「楽譜に示された音の(再現的な)表現に留まらない、彼らそれぞれの独自の工夫を加えた個性豊かな音楽表現を目指す」ことを、カリキュラムの主軸の一つとして据え、指導を行ってきた。具体的に、今回の題材と直接的に関連する過去の取り組みとして、いくつかの実践を行ってきたので、まずは簡単に紹介する。